昨日の雲は帰ってこない

フロンティア・ブックス

FRONTIER BOOKS

KOBUNDO

昨日の雲は帰ってこない

長尾広生著

昨日の雲は帰ってこない

長尾広生
ながお こうせい

1922年，広島に生まれる。
北京興亜学院卒業後，従軍，新聞記者，会社員を経て中国研究のかたわら，ラジオ・テレビのドラマに執筆。
TVドラマの主な作品に，オリジナル「ふりむけなばひとり」連続ドラマ脚色「神阪四郎の犯罪」「乙女の手記」「斜陽」「百済の草」などがある。
住所・東京都三鷹市北野453

昭和三八年六月一五日　初版発行
昭和三八年七月一日　再版発行

定価二八〇円

著者　長尾広生
発行者　渡辺昭男
印刷所　港北出版印刷株式会社

発行所　株式会社　弘文堂
本社　東京都千代田区神田駿河台四の四
営業所　東京都文京区西古川町一四
電話（三五一）九二二三
振替　東京五三九〇九

Printed in Japan

私たちの試み

活字と映像の放送メディアが、もともと全く異質のものであることは、今さら言うまでもありません。

ところが連続放送劇の場合、その素材を活字メディアに求め、その殆んどをそこに依存しているというのが目下の実情で、このためテレビ化に当っては、原作者の側からすれば作品の主題の歪曲など不満の声があり、また制作者の側からすれば映画界との原作の奪いあいなど各種のトラブルが生じ、とくに長期間にわたる連続放送劇の場合に著しいものがあります。

そこでこうした問題を解決するために、連続放送劇の土台となる作品をまず脚本家自身に執筆依頼し、その原作者と他の脚本家が協力してシナリオを書き、長期にわたる連続放送劇を放送しようという考えが生まれました。さらに、放送と同時に、小説の出版とレコードの発売も同時にスタートする、二者より三者のメディアが結んだ方が、より以上効果をあげ得るのではないかと考えたのです。

そこで昨年の暮れから編成部の岩崎嘉一君が中心になって、フロンティアブックスで意欲的な出版をされている弘文堂と、またレコードは数々のヒット曲を出しているキングレコードと話しあいをすすめ、このたび実現の運びに至りました。

このことはしかし、単なる紛争解決の一手段にとどまるだけではなく、私たち放送事業にたずさわる者にとっても、放送素材の自らの手による創造として開拓しなければならない問題なのです。この企画を成功させるために、みなさんのご支援をお願いするしだいです。

おわりに、新しい試みにご賛同、ご協力して下さった弘文堂の編集部長田村勝夫氏、キングレコード企画宣伝課長大沢俊夫氏に厚くお礼申し上げます。

また、題名の「昨日の雲は帰ってこない」は、三好達治先生の詩の一節を使わせて頂きました。

一九六三年五月十五日

東京放送テレビ編成局長

大森　直道

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

私はここ数年、ずっとテレビ、ラジオのドラマを書き続けています。もう百本以上になります。しかし、そのなかにメロドラマと呼ばれるものは殆んどありません。

そういう私にメロドラマを書かせようという話が、TBSテレビの映画制作課からあったとき、また、それをまず本にしようと弘文堂の勧めがあったとき、私はためらいながらも、私なりの考えをそこで試みようと決心したのでした。

ヒロインがなんの主体性も持たず、いつも外的条件に左右される被害者である、それがいつの間にか、メロドラマの条件になっているが、この一種の定型を打ち破るメロドラマを作りたい――これが制作者の意図であり、この新しい意欲がなければ、私もまたメロドラマを書こうと決心することはなかったかもしれません。

メロドラマだ、新派悲劇だという言葉が一種の軽蔑を含む言葉になってしまったのは、類型の繰り返しに、その理由があったのでしょう。しかし、メロドラマがいぜんとして大衆娯楽の

王座を占めている点を考えるなら、一言のもとにメロドラマだ、と片づけるのではなしに、多くの人の新しい創造の努力が、もっとあっていいのではないか、とも考えました。

私は、この錯雑した現代の人間の関係は、被害者であると同時に加害者であるという奇妙な連帯関係だと思っているので、メロドラマのヒロインが加害者であっても一向に差し支えないし、加害者たることに追込まれる方にこそ、現代のメロドラマの方向があるのではないか——。そんなことを手さぐりしているうちに、しだいにこのフィクションのヒロイン未知子のイメージが浮かびあがってきました。

そして浮かびあがった瞬間、イメージを温める暇もなく、このメロドラマの現実の中で、ヒロインを歩かせなければならないという羽目におちいっていました。すさまじいマスコミの歯車の回転の中から、いわば未熟児のまま放りだしたような感じがします。

この未知子の生き方に対して、どれほどの共感を得ることができるでしょうか。幾分の期待とそして大きな不安に襲われながら、私は、彼女にしてやれなかったことのあれこれを思い浮かべ、そして、もうこれから先は自分一人で歩いて行ってくれ、他人からどんなことをされても、結局、自分のことは自分で責任をとるしかないんだ、と言ってやるほかはないような気持です。

この私のつたないフィクションは、適切な助言を与えて下さった弘文堂の田村勝夫氏、生田栄子さん、発案者であるTBS映画制作課の岩崎文隆、岩崎嘉一両氏の温かい激励、シナリオの棟明郎、内藤保彦両氏、NACのスタッフの方々の協力なしには生まれませんでした。心から感謝します。

一九六三年五月二十日

長尾広生

目次

私たちの試み
まえがき
第一章　丁字路……一
第二章　霧ガ沼……三
第三章　夢を抱く日……二九
第四章　絵を買う男……三九
第五章　虚構のとき……四七
第六章　雲を撃つ……五九
第七章　復讐の城……六九
第八章　誘う視線……八六

第九章　得がたき敗北……九八
第十章　哀しき願い……一〇八
第十一章　吹き溜り……一三二
第十二章　いつかわが手に……一四五
第十三章　雲の壁……一六四
第十四章　別れてもなお……一七七
第十五章　遠ければこそ……一九一
第十六章　霧の埋葬……二〇四
第十七章　奪い得ぬもの……二〇九

装幀・八木沢茂夫

第一章　丁字路

宗方未知子は、デパートの装身具売場やその専門店をのぞいてみるのに週二日をあてている。ヒントを得るのが目的で、それはアクセサリーのデザイナーである彼女にとって、仕事の大切な一部となっていた。

その日、未知子は目先を変えて青山のイソベへ出かけた。イソベは〝買わずに借りよう〟というキャッチフレーズで、女性の身を飾るすべてのものを、時間で貸しつける。彼女はその店の名前を妹の典子から聞かされていた。

さぞかし豪華な装身具のコレクションがあるにちがいないし、流行の行方を探る助けになるにちがいないと思って来たのだが、期待はずれで失望した。

借りる女性は、アクセサリーを頻繁に取り換えるために利用しているというのが大部分で、かくべつ豪華なものばかり、借りだすとは限っていないのだった。

木彫り、竹、貝、パール、木の実などの材料を使ったアクセサリーの数々に、それほど目を惹くものはなかったが、たったひとつ、変ったペンダントを見つけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ガラス玉の中に桃色の液体が入っていて、その中で小さなオパールのかけらがゆれている。時価五千円ぐらいだろうか。貸し賃は二十四時間で三百円ということであった。

さんざん出させた挙句、手ぶらで帰るわけにもいかないので未知子はそのペンダントを借りることにした。

救急車のサイレンが近づくのを聞いたのは、そのときである。

「また、なにか事故よ」

女店員の声を背中に店を出ると、未知子は人だかりに埋まった救急車をみた。

ビル建築の現場でクレーンが倒れ、誰かが押しつぶされたらしい、とかけつけた昼休みのBGが話している。

未知子もこわいものみたさで、人垣に加わり、背のびして見ようとした瞬間を、いやというほどうしろから突きとばされた。わるいことに、ハイヒールの踵が、工事現場付近の、コンクリートの割れ目にはさまって、彼女はよろめき、膝をついた。

突きとばしたのは、十六ミリのカメラを持った男で

「おい、これたのむぜ！」

と後に続く男に乱暴に言いすてると強引に人垣の中へ割りこんでいった。

人を突きとばしておいて、これたのむぜーとはなんという言い方だろう。

「どうも失礼しました。痛みますか」

カメラマンにたのむぜと言われた男が、素早く抱きおこして、未知子のスカートのほこりを払っている。

ふりかえった二、三人の見物人の目が何十にも見えて恥ずかしい。未知子はあわてて男の手を払

いのけた。

「あ、これはたいへんだ！」

男はヒールのとれた格好のつかない未知子の靴をつまみあげ、あたりを見回すと

「よし、あそこだ」

ともう駆けだしていた。

全くひどい、ちょっとやそっとで許してやるものか、と未知子は思った。

しかしその怒りはほんの十五、六分ののち、他愛なくやわらげられてしまった。男はすぐそこに見える靴屋に飛び込み、ヒールのとれた未知子の靴と全く同じものを買って戻ってきたからである。

叩きこわすような勢いで靴の紙箱をあけると、男は、膝まずいて未知子の脚にはかせようとするのだった。

あわててそれを断わって、未知子は自分で靴をはき終わるとやっとほっとした。そしてその男の顔を落ち着いて初めて見た。そして一瞬、あっと息をのんだ。

結城治彦にちがいない。

「ほかにどこかお怪我でもされておりませんか」

しかし男の他人行儀な挨拶が同じペースで続くので、よく似ているけれど、やっぱり人違いだったのかもしれないと思った。

膝が痛いと言ったところで始まらない。未知子は急いでその場を引揚げようとして初めて、先刻借りてきたペンダントのないことに気がついた。のびあがって覗こうとした時、胸のペンダントに無意識に手をひっかけたらしい。

それは彼女の靴より高価なものであった。

鎖だけはすぐみつかったが、ガラス玉はコンクリートの破片にぶつかって砕け散ってしまったらしく、むろんその中の宝石のかけらはどこへ行っ

たかわからない。

「じゃあ、そのレントのチケットを下さい。イソベ？　ああ、あそこに見える店ですね。あとでぼくが片をつけておきます。今、仕事中なのであらためてお詫びにあがりますが、ぼくこういうものです」

男は名刺を未知子に渡すと、さっきのカメラマンと同じように人垣の中へ強引に割り込んで行った。

未知子は名刺を見た。

「ＫＢＳテレビ報道部　結城治彦」

やっぱり結城治彦であった。いちどはそうにちがいないと未知子のほうは思ったのに、先方がこちらを未知子だと気づいていない様子なのが癪だった。

結城治彦とはここ数年、顔を会わせたことがない。鵜之町で通りかかりに顔を会わせたことがあったが、両方の家が反目しあっているという事情もあって、ろくに話したこともなかった。だから治彦が変ったといっても表面的な印象にすぎないけれど、しかし少なくとも昔の、と言っても四、五年前の治彦には、いま彼女が目の前にしたような、機敏でがむしゃらなところはなかった。どちらかと言えば内向的で温和な性格だと、未知子は思っていたのである。

しかし仕事のためとは言え、そんなふうに突っ放されてみると、あらためて腹が立ってくるのだった。第一、こちらの名前も聞かずに自分の名刺だけ渡して行ってしまうということは、ＫＢＳテレビまでこいということなのだろうか。

未知子が勤めている岡村装美社は始めは室内装飾や家具の設計を専門にやっていたのだが、最近アクセサリーのほうにも手をのばして、こちらは工場まで作っていた。未知子はもともとはインテ

リアルデザイナーとして椅子や机、鏡の設計をしていたのだが、会社がアクセサリー製作のほうに乗り出すと同時にそちらへ回されたのである。

結城治彦とのこんどの小さな事件は、未知子がアクセサリーデザインへ回されてからぶつかった最初の不愉快な事件であった。

謝りにくると言ったのだからくるのが当然と、始めのうちこそ単純な気持でいたものが、相手が結城治彦であることからしだいに複雑なものになってきた。

未知子の家は、鵜之町でブドウ酒の醸造をしている。戦争直後、隆盛の一時期を迎えたが、大きな企業化の波にのりおくれて、今では純粋ブドウ酒の醸造に力をいれているものの量は少ないものだった。純粋ブドウ酒は、ブドウの粒を選ぶため、出来高の割には大量の酒用ブドウを必要とするのだが、宗方醸造所有のブドウ園では足りないので遠く、山梨から移入する。近くの結城ブドウ園から買うことが一番望ましいのに、それができなかった。

父の代に宗方と結城の仲がこじれてしまって、両方の父親が死んでしまってからも、もちろんつきあいがない。二つの家の間には、ブドウ園を買いとったとか買い戻したとか、そういうことが繰り返されて蓄積された反目を、両方の母親が引継いでいる。土地というものは売手と買手の間に必ずと言っていいくらい反目をもたらすものらしかった。子供のうちこそ未知子は結城の兄弟と遊んでいたのだが、物心つくとしだいに離れてしまった。それは多分に口うるさい母親達の反目に影響されたのである。

未知子は、治彦が詫びにこないのもそんなことが絡んでいるのかもしれないと考えて憂鬱になった。

イソベへ電話してみると、ペンダント破損の金は結城治彦が支払っていた。

そうだとすれば――と未知子は思った。

そのチケットによって治彦は「宗方未知子」の存在をはっきり知った筈である。あのとき、靴のヒールを折られたのが宗方未知子であると知った以上、あやまりに行くと言った自分の言葉を治彦が実行しないのは、やはり二つの家のそんなことが理由になっているのかもしれない――。

未知子はそう考えると、いらいらしてきた。いずれにしろ、この一件を片づけないと仕事も前に進まないような気がして、治彦への電話をとりあげたのは、事件の数日後であった。

ＫＢＳ報道部の電話は、割合紳士的で、結城治彦はきようはおそ番だから、三時頃には出勤してくる筈という返事である。時計を見ると三時に三十分前、こういう機会にそういう場所をのぞいてみたいという気になって、未知子はＫＢＳへ出かけて行った。

ＫＢＳのテレビ局は、昔そこに歩兵聯隊があったという小高い丘の上にあった。ごみごみした赤坂の料亭街が見下せて、その向こうに国会議事堂の塔が見えた。

頬に当たる風が春の気配をのせていて、未知子は今年は一度も、霧ガ沼の鴨撃ちに行かなかった、と微かに後悔した。

テレビ局の玄関受付で、結城治彦の在否を訊ねたが、三時を過ぎているのにまだ来ていなかった。玄関を出入りする局員や、それから顔に見覚えのある俳優らしい人物に、しばらくは気をまぎらせていることができたが、三時半を過ぎるとさすがに待ちくたびれて、席を立った。

本館とテレビ局舎の間の急な坂道をおりていくと、向こうから上背のある精悍な顔つきの若い男

が上ってくる。
結城治彦かも知れない――と緊張したがそうではなかった。こうして小さな期待がつぎつぎに裏切られてみると、やっぱり腹が立ってきた。
岡村装美社の近くまで帰ってきていながら、未知子は喫茶店Rへ足を向けた。なんだかそのまま勤め先の皆の前に顔を出せない、理由もなくそんな気がしていた。
ところが黄色いプラスチックのドアを押すと、そこに結城治彦が立っていて、入口に近いピンクの受話器を手に
「そうですか、宗方さんはまだお帰りになりませんか。行先はわからないんですね。いやどうも」
などと言っている。傍の未知子に気づいて
「や、ここにいました」
と受話器を置いた。
「ぼくは一時間もここにこうしているんですよ」
「私はKBSテレビへ行っていましたの」
「え？　なんの用事でですか」
「あなたにお会いしようと思って」
「どうしてまた？　ま、とにかく座りましょう」
席に着いても、しかし未知子は言うだけ言ったら帰ってしまう格好で、椅子の端に掛けていた。
「だって、結城さんがいっこうに私の所へいらっしゃらないからですわ。用事があるのなら来なさいということなのかしらと思ったのです。だって、そうじゃないでしょうか。私の名前も聞かずに名刺だけ渡して、あとは知らん顔なさってるんですもの」
「知らん顔って、ぼくはあなたの名前をあのとき始めっから知ってたんですよ」
え？　と問い返す目になって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com